

# SSKW

# 海から海へ

No. 36 2014. 5. 10 【編集人】

特定非営利活動法人 海から海へ

〒182-0024 東京都調布市布田 1-32-5

マートルコート調布 407

Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878

<http://umi.or.jp> [office@umi.or.jp](mailto:office@umi.or.jp)



仲間 My Friends 1620x1303 1998 © Mizuki Tanaka

海から海へは、障がいをもつ人から渡される豊富なものの存在に気づき、人々と共有するため、障がいをもつ人を中心とした、文化芸術活動、研究活動、社会教育活動、心理カウンセリングなどの支援活動を行うこと、および、それらの活動を通し、障がいの有無にかかわらず、地域・国内・国外を問わず広く交流を深め、人々がより良く生きることに貢献することを目的として活動しています。

## 田中瑞木美術館展示作品

5月4日(日)～7月27日(日)

以下の作品を展示いたします。

12歳から38歳までの作品15点です。

- よそのねこ 380x455 1985
- よそのとり 380x455 1985
- 静物 350x270 1985
- 黒猫を抱いたわたし 333x242 1988
- 雨の日のママ 727x606 1988
- 泰三くんと絃子ちゃん 727x606 1992
- 蝶とカーネーション 727x606 1994
- ねこの原っぱ 1303x1620 1994
- やぎたちの午後 910x1167 1995
- 七羽のうさぎ 727x910 1996
- さくら 1167x910 1996
- 春 910x727 2000
- チューリップがいいね 910x727 2009
- カラーのささやき 910x727 2009
- 蝶の宙 910x727 2011
- スウェーデン刺繍の作品

縦 x 横(mm) 制作年

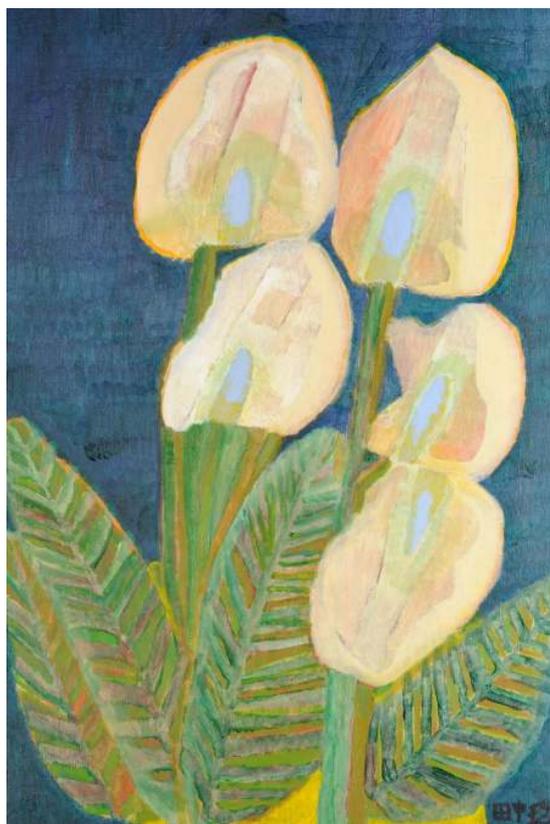


雨の日のママ

「仲間」と題された表紙の絵について

中学校で初めてスウェーデン刺繍を習った。思春期の嵐のまっただ中、不適応が続きつらい毎日をすごした。しかし、刺繍の腕前をあげた時期でもある。

さて時を経て、絵の中は福祉作業所。エプロン姿の4人がスウェーデン刺繍をしている。周りに置かれた糸や布とさまざまな彩りの作品が場所を暖かく包み込んでいる。4人の視線がとても柔らかい。それに流れている空気が澄んでいる。嵐が過ぎ去り、日々の生活が穏やかになったころ、仲間に助けられ、仲間を大切にという画家の思いが作品になった。



カラーのささやき

## 画家の近況

先日、高校の同窓会が行われた。同期生は口々に画家の近況を尋ねる。「娘さんはいまも絵を描いている?」「また、展覧会があったら知らせてね」「娘さんは元気になっている?」と。

2000年、長岡市立中央図書館で画家の個展が開催されたとき、地元の高校の仲間(先輩も含む)が大勢協力してくれた。仲間はそのときから14年経っていても、あのときの画家の絵の印象と迫力ある展覧会の思い出が

それぞれの胸の奥にしまわれ、年に1回こうして記憶の奥から鮮やかに取り出され、楽しみに話題にされる。私はうれしくなる。私は改めて同期生のやさしい気持ちに触れ、感謝の言葉が浮かんでくる。「みなさん、ありがとう」。

さて、尋ねられたことの答えの一つ目は、「この1年間、画家は絵筆を持たなかった」。どうしてなのかな。私はいろいろと考えてみるが、「よくわかりません」。

4、5年前。毎年新年会にお誘いを受ける岡部耕典さん(早稲田大学文化構想学部・現代人間論系教授)宅で奥様の知美さんが、「自閉症の子どもって、飽きる」と言われたとき、私にはまさに「目からうろこ」のような衝撃があった。

そういえば、あんなにプールへ通い続けたのにいまはまったく行かない、あんなにキリンレモンが好きだったのに、あんなに午後の紅茶が好きだったのに、いまはまったく買わないし、飲まない。あんなに飛行機が嫌いだったのにいまは平気になって旅行に行きたいとしょっちゅう言う。

あんなに好きな白いご飯はいまもあんなに好きな白いご飯のままだし、あんなに好きな自転車もいまもあんなに好きな自転車だし、あんなに好きな猫はいまもあんなに好きな猫だし。変わらないままのものやことも、じつはたくさんあるけど。

あんなに絵を描いていたのにいまはまったく描こうとしない、というのもありかなと考えるのが普通のような気がしてくる。

私だって、誰かだって、ずっとひとつのことに執着するのって、変だ。同じことしかしないのはわけがあることかもしれない。変わるのむしろ自然なこと。そのようにみえてくる画家の姿が画家の近況です。

もうひとつの答えは、「神戸で展覧会を開催するかもしれない」です。神戸に小児科医の今西宏之先生がいます。子どものことで知り合い、家族ぐるみで親しくお付き合いがあります。神戸での個展では何度も絵を見ていただきました。

先生は今夏ハーバーランドに発達クリニック「みなとのこども診察室」を開業されることになりました。そのオープンを記念して、展覧会を企画しているところです。詳細が固まり次第、ご報告したいと思います。

最後の答えです。「画家は元気です」よ!

最近絵筆の代わりに掃除機を持ち、朝早くから家中を掃除します。階下の住人にうるさく聞こえるかもしれないと気を揉む私のことはお構いなし。きれいになりたいという気持ちが強いようです。バスルーム、洗面室、トイレなどもびかびかです。それから、パンを作ります。週に2、3回おいしいロールパンを16個作ります。手を動かすのが好きなようです。私は、「ありがとう」と言います。その言葉を娘が待っているから、必ず言います。娘の笑顔が返っ

てきます。

くるみ入りパン、手作りヨーグルト、豆乳、果物、大好きなコーヒーが朝の食卓に並びます。笑顔です。

仕事へも週4日出かけます。高齢者施設の家事スタッフの仕事です。仕事から帰ると満足そうな笑顔です。

明るいうちは身体を動かし、健康的な食事を摂り、大体ニコニコしています。元気のもとはこの運動と食べ物と気分から来るのでしょうか。

春から夏へ、季節は変化していきます。私たちも変化しながら生き続けています。人と人がつながったことは大事で、ときどきそのことに幸いがあると気づかせてもらいながら、また新しい気持ちで歩き続けていこうと画家から教えてもらいます。(学芸員 阿部愛子)

## Mさんとのゲーム

最近、私は画家のMさんと、「パパ反省!」ゲームというのを楽しんでいます。いろんなバリエーションがありますが、例えば、外出後、人ごみで大きな声を出していた子どものことが話題になったとき。Mさんはとくに高音に敏感です。Mさんと私の会話「小さい子、うるさかったね。ご迷惑」。「ご迷惑だね、Mちゃん困っちゃったね」。「困っちゃったねー」。「困っちゃうと?」「Mちゃん泣いちゃうよ」。

「Mちゃん泣いちゃうと心配だね。心配するのは誰?」「Oさん心配」。「そうだね、Oさん心配!」「誰が悪い?」「そうだね、パパが悪い。パパが注意しなかったからね」。ここで、私はお猿の反省ポーズをして「パパ反省!Oさんが心配、I先生が心配、Sさんが心配!」と言います。Mさんは「Oさんに言いつけちゃう、I先生に言いつけちゃう、Sさんに言いつけちゃう」とニコニコ顔になります。Oさんは職場のホーム長さん、I先生は主治医、Sさんは作業所のときの職員さんです。

皆さんは、周りとなじめず、疎外感を感じ、そのことにどうしても折り合いがつかない、でもその場から離れることもできず、我慢せざるを得ないという場に置かれたことはないでしょうか。こういう状況では、自分を守ることに手一杯になってしまい、あげく自分をみじめに思い、どうしてみんなと同じようにできないんだろう、と自分を否定することになってしまいます。

Mさんは、生まれた時からこうした疎外感を日常的に持っていたと思います。そんな中で彼女は自分を否定することなく、たくさんのことを学び、たくさんことができるようになっていきます。これはすごいことです。たとえば、彼女は休まず仕事場に出かけ、一生懸命仕事をしてきます。

休みの日にも家事をたくさん分担しています。お買い物へ行くにも身を惜しみません。自分が何かをしてあげると人が喜ぶ、そうした活動はしなければいけないこと、と強く認識しています。とてもまじめです。

しかし、まじめでい続けることはとても疲れると思います。そのまじめさを少し外すのに、私たちのゲームは役立っているように思います。彼女は、ほんとうはパパが悪いとは思っていません。そんな理屈はどうでもよくって、なんか楽しい、ことばの練習にもなるし、気分が少し晴れる。

私について言えば、このゲームによって反省することが自然にできるようになりました。反省することは自分を否定することではなくて、自分の可能性を認めることだと思います。ぐずぐず言わず、「反省!」と宣言すればいい。すぐに反省するとバカにされるのでは、と心配になりますが、気づかなかった分だけ足りないものがあつたのですから、事実は認めるのが一番です。私はだいぶ成長したかな、と思います。(阿部公輝)

### 分からないと言うこと

定年になって、仕事が変わりました。組織の中で果たしていた役割と同じもの、またはそれに変わるものを広い社会の中で見いだすことは容易でなく、それまでの一部を維持しつつ、異なるものを少しずつ取り入れてきました。

新しい仕事は複数ありますが、いずれも人の話を聴くことなしに成り立たない点では前の仕事とまったく同じです。前も今も、異なる時間空間を生きる人からその世界のことを教えてもらい、できれば寄り添わせていただき、ご本人が気分良くなる道を一緒に探すということをしています。

以前私は理系の大学で教員をしていました。そこでは実験や実習があります。内容はすでに授業で分かっているし、テキストに書いてある方法でやればいい、変だと思ったら言ってくるようにと言って指導者は引っ込んでしまいます。しかし学生は何も言ってこない。何事もなく時間は過ぎていきます。

分からないことを「分からない」と人に言えることはとても勇気がいります。そんなことも分からないのかと馬鹿にされることを恐れて黙っていたり、分からないことでも分かっているかのようにふるまったりすることはよくあります。私たちの社会は、「分からない」と言いにくい、あるいはそう言うことに皆が慣れていない社会と思います。

「人に迷惑をかけないように」と言われて育つと、なかなか人に相談できないことになるように思います。「自立」ということもよく言われますが、一人でなんでもやらなく

てはとったり、困っても自分で解決しなければとったり、これができないのは自分のせい、人に頼ってはいけないう思ったり、それができない自分は自立していないとしたりします。

生き物は他者のいのちをいただかないと、自分の生命を維持できません。自分が生きるには誰かの力を借りなければならず、他人も自分の力を借りなければ生きていけません。人間も生き物ですから、自分一人で生きていくことは原理的に不可能です。これは明らかな事実です。そんなことを頼りに昔も今も仕事をしています。(阿部公輝)

### 平成26年度通常総会開催のお知らせ

日時 2014年5月25日(日) 午前11時~12時  
場所 調布市布田1-32-5 マートルコート調布407

#### 編集後記

昨年8月より、休館となっていた美術館がようやく再開した。9ヶ月に及ぶ休みは初めて。夏秋冬、そして春、時は流れ、桜もきちんと花開き花びら散った。

その間、美術館のスペースは画家の生活の場と変身していた。猫2匹も同居。猫同士はテリトリーの奪い合いで体調不良となったが、画家は環境の変化に影響を受けなかった。猫と比較する訳ではないが、画家の成長を感じる。

20歳頃まで新しいことが苦手だったが、今は好奇心旺盛。新しい家にもすぐに慣れ、階下の住人との食べ物のやり取りに興味津々。頂きモノにはすごく敏感。喜びに素直さが現れている。いいなあと思う。

昔より人と人の中にモノは行き来して来た。こころの行き来もきっとありそうだ。いつまでもいつまでもと願っている。(愛)

特定非営利活動法人 海から海へ

<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp

振込口座 ゆうちょ振替 : 00110-0-684539

みずほ銀行 調布支店 普通預金 8082621

2014年5月10日 海から海へ No. 36

編集責任者 阿部公輝

〒182-0024 東京都調布市布田1-32-5

マートルコート調布407

Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878

発行所 〒157-0073 東京都世田谷区砩6-26-21

特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

定価 200円